今月の窓

ゲマインシャフト・ルネッサンス

当総研では再生可能エネルギーに関するシンポジウムの開催を目的とし，ドイツにおいてエネルギー協同組合の設立に深く関わっている２人の協同組合関係者を招聘した。シンポジウムの詳細は本誌６月号において紹介の予定であるが，ここでは，彼らとの交流を通じて印象に残ったいくつかの点を紹介することとしたい。

ドイツにおける再生可能エネルギーの事業主体として，市民・農民などが組織するエネルギー協同組合の設立が近年急速に増加している。特に注目されるのは，それらの動きが政府なり中央機関の強い指導を受けてということではなく，極めて「草の根」的な運動として展開されている点である。さらに，それらは単なるエネルギー生産にとどまらず，農村社会において人々が自らの地域を改善していこうとする，新たな運動の萌芽となりつつある。

例えば，村の多くの人々が共同で古い建物を改修し，村のレストランとして蘇らせる，共同の介護施設を運営する，といった幅広い取組みが広がりつつある。それらは，必ずしもエネルギー協同組合自体の取組みとして行われているものではないが，エネルギー生産での共同により，人々が共同して何かを行うことの可能性，価値を知り，それが新たな運動への広がりを生んでいるように感じられるのである。固定価格買取制度下での再生可能エネルギー事業は，収支計算が比較的容易であり，人々が共同事業として最初に取り組む，いわば「共同への入り口」として大きな意味を持ったように思われる。

こうした共同活動の広がりについて，来日したドイツの人々が語る時，しばしば耳にしたのが「ゲマインシャフト・ルネッサンス」という言葉であった。ここで使われている「ゲマインシャフト」は，我々がかつて学んだ，血縁・地縁等による自然発生的共同体といった意味とはやや異なり，そうした共同体における人々の相互関係，いわば，「絆」「チームスピリット」といったものに近いニュアンスであるように感じる。そうした人々相互の関係が，共同活動の広がりの背景にあり，またそうした活動が人々相互の関係性を強めていく，という文脈でこの言葉が使われている。近年のドイツにおいては，この「ゲマインシャフト・ルネッサンス」という言葉がしばしば語られるようになったという。その背景をどのように考えればよいのであろうか。

それが「ルネッサンス」である以上，人々の中に，かつてあったものが今失われているという意識があったことを意味する。近年，民間活力導入の名のもとに，競争的関係がことさらに重視され，また人々の生活に関わる様々な政策が，グローバリズム，グローバルスタンダードの名のもとに，国家間，多国籍企業間のルールにより決定されるといった傾向が強まっている。そうしたなかで，市民が，かつて存在した共同の関係性を取り戻し，自らの生活の在り方を自らが決定していこうとする動き，それがドイツにおける新たな協同組合設立の背景にあるのではなかろうか。ドイツの再生可能エネルギーについて論ずる時，彼我の制度の違い，環境条件の違い等，我々が「できない理由」を数々指摘する論者も多い。しかし，真に学ぶべき点は，何かをきっかけとすれば，こうした人々の自立的な活動が起こりうるという，まさにその点にあるのではなかろうか。

（（株）農林中金総合研究所 常務取締役　原　弘平・はら こうへい）

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/